

「農家に学び、地域に学べと」

く地域との結びつきでどんな教育をすすめたか

内山雄平

はじめに く農家調査で地域に入るく

私は、村上桜ヶ丘高校在任中（95～03年）、生徒が自分たちの住む地域農業・農村の現状を正しく理解し地域農業の抱えている問題や課題を明らかにするため、農家調査を毎年実施してきた（教科「総合実習」で「農業経済」を選択する農業経済科3年生、5～10人、週2時間。岩船管内の農家・事業所）。

そして、この調査から、生徒がさらに追求したい課題をテーマとして選び、「卒業論文」と称して生徒に課した。地域農業・農村の現実は、生徒たちに自ら学ぼうとする意欲を掻きたてる力が潜んでいるからである。

1、調査のための事前学習

事前学習として、我が国農業全体の動向を理解するため、農業基本法制定以降の図説、「30年間の食料・農業の動向について」（92年度版『農業白書』）や新農業基本法にふれた『農業白書』を活用し、生徒自らの手で学習することから始めた。

例えば、「食料消費の変化と食生活の向上」「農業生産の選択拡大と農産物価格」「地球環境問題と水田農業の特質」など、これらを項目毎に生徒に割り当て、用語の説明やその内容について報告し、それにもとづいて生徒同士が疑問点など出し合い、より理解を深めるように試みた。

このような学習形態は、生徒には初めての経験で、報告するための資料づくりが大変で、その授業日は魔の〇〇曜日と言われた。

2、農家の調査方法と内容

調査農家は、岩船農業改良普及センターの協力を得て、先進的な農家を選び、夏休みを利用して生徒と一緒に、マイクロバス（運転は県臨時職員）で、見学および聞き取り調査を行った。

調査内容は、経営概況、経営を始めた動機、どんな壁をどう乗り越えたか、成果と課題は何か、農業に対する生きがいなどを中心に、生徒の希望する調査項目も含め直接経営主から聞いた。

調査農家および事業所は、稲作・野菜園芸・畜産・果樹の各農家、農事組合法人、有限会社、お茶屋、ヤマメ養殖所、酒造会社、役場・農協、青果市場などである。

いずれの農家や事業所も、この調査依頼を非常に好意的に受けとめ、中にはジュースや朝飯（朝早い青果市場）も提供してくれた。

また、生徒は、いずれの先進農家の話にも、真剣に

耳を傾け、日頃の授業時とは違って変わった態度でメモをとった。なかには、「夏休み4日間も調査日に取られると、バイト料が28,000円も損する」と言って拒もうとした生徒もいた。「バイト料をはるかに超える財産を身に付けることが出来るぞ」と説得され、参加した彼は最初の聞き取り調査で、農家の生身の話に虜となるほどいろいろな質問を浴びせ、1回もサボルことはなかった。

3、生徒はどんな研究テーマを設定し、研究をすすめたか

農家等の話を聞き調査した結果から、特に興味・関心を引いた疑問を解くため、再度の調査や資料等によって、追求することとした。無論、小さい頃から疑問に感じ、明らかにしたい課題も含めた。

このようにして生徒の取り組んだ研究テーマの中から、そのいくつかを紹介したい。なお、これは生徒がまとめたものや毎年実施した「卒論」研究発表用の要旨に加筆・修正したものである。

△食糧の確保▽

●我が国の低下した自給率を高めるために Kさん

私が何故、この問題を取り上げたか、第1の理由は、瞬時でも増え続ける人口増加や二酸化炭素濃度の増加による地球環境問題で食糧不足が予想されること、第2に中条市場を見学した際、温度調節された室内に海外的輸入された大量の青果物を見て、こんな身近なところにも貯蔵しているのか、とショックを受けたからである。今までにないほど食糧問題に不安を強く感じ、調べることにした。

何故、日本の食料自給率が41%まで低下したか、ガット体制から、ガットウルグアイラウンドまでの決着を調べたら、我が国の農産物の自由化政策にあることがわかった。特にミニマムアクセスによるコメの輸入は水田農業に大きな打撃を与えている。よりいっそう減反政策のみに力を入れ、麦・大豆の価格保障の努力を怠ってきた。

食糧全体の自給率の維持・向上を図るためのポイントは、①自給率の目標を策定し、その維持と向上を図る、②生産者と消費者の両方から国民運動として取り組む、③輸入依存度の高い大豆・麦・飼料作物を中心に生産コストの低減を図る、④自給率を高める観点から情報の提供、教育・啓発を体系的に行うこと、と私

は考える。

そのため、自給率の一番低い大豆・麦の栽培に政府はしつかりと価格保障し、これまでの「転作」でなく「本作」にする。それには、政府が打ち出した「水田農業の確立」で、「水田の機能を生かし、他品目と関連させながら、水稻をはじめ、多様な作物を栽培し、合理的な輪作体系で、水田から多くの生産をあげる」のが一番望ましいと考えた。

△美味しい味▽

●女川のコメは、何故おいしいか Kさん

女川の上野新農業生産組合（岩船郡関川村・中山間地帯）を訪ねました。生産組合長は、全国に名を馳せている「越乃寒梅」の酒づくりの場長に、この地域の酒米が新潟県で一番良いといわれ、新発田市の佐藤製菓社長も、このモチゴメは一番品質がすぐれていると、話してくれました。

私は、何故この女川で生産されるコメがそんなに品質が良く、おいしいのかと疑問に思い、これを追及してみることになりました。

実際に調べたことは、食味検査と気候の比較です。食味検査はコメの品質判定と成分分析です。成分分析

ではタンパク質・水分・アミノ酸、脂肪酸が低く、これらの数値の低いことがおいしいコメの条件であることが分かりました。

気候についてみると、最高・最低温度とも低く、その日較差も大きいことが分かりました。こうした気候がおいしいコメを作る条件だといわれています。土壌条件も調べました。最後に実際にコメを炊いて試食しましたが、すぐおいしいことが分かりました。

私は女川のコメはおいしいという評判を聞きたただ単純に何故だろうと思いついた結果、卒業前にしてこんなすごい勉強になるのを知ってとても良かった。

△後日談▽

この研究結果についてスライドを用いて、この地区の農家の方々や農協の職員を交えて報告会を実施した。当農業生産組合長は、自分たちの栽培しているコメのおいしさを科学的に裏付けてくれ、大変よい勉強になったと非常に喜んでくれた。

●神林ポーク（豚肉）は何故おいしいか 丁君

最近、ごく普通に食べている豚肉、同じ豚肉でも味の点でおおきな違いがあることや、価格の点で違いがあるのはなぜでしょうか。そこで、地元でもおいし

いと評判の神林ポークを取り上げ、その原因を調べることにしました。

豚肉の肉質に影響するのは、①品種 ②性 ③交配種 ④飼料内容などがあることが分かりました。神林ポークを生産している細野さんを探ね、おいしい肉が生産できる原因を調査したところ、

①肉質でおいしいといわれている交雑種のWLDを用いていること。

②飼料は肥育後期（体重60kg以上出荷まで）、普通の後期用飼料の他に大麦を一割程度混ぜ合わせて与えていること。大麦は脂肪を純白にし、硬くするうえに、このような肉は風味をよくすると言われているからです。

私たちがおいしい豚肉を食べることができるのも、どのようにしたらおいしい肉ができるかを絶えず考え、苦勞して飼育している農家の方がいるからだと思えました。

この研究をやつて行くうえで、面倒臭いと思うこともあったけど、最後までやり遂げてみて、とても充実感を味わうことができました。

△後継ぎと生きがい▽

●長男は、何故家の農業を継ぐのか W君

農家調査に出かけ、家族農業経営を営んでいる経営主に、なぜ農業を継いだのかと尋ねると、決まって「長男だから」と答えます。自分の進みたい道があったとしても親に自分の人生を決められていたようです。今は自分の好きな道をえらべるのに昔と、今とではどうしてこんなに違うのかを知りたいと思い、調べて見ることにしました。

資料を調べていくうちに、農業に限らずいろいろな職業の長男も家をつがければならないことを知りました。それは家父長制度と年齢階梯制度があつたからだと気づきました。この家父長制度や「家」制度は、儒教イデオロギーによって強化されていたことも分かりました。このため、小さい頃から自然と自分の家を継ぐのが当たり前、父親が絶対的存在だったので、子どもは親に逆らえないようになっていたのです。親と子供との関係は絶対的な上下関係にあり、家を継ぐ、継がないの問題、だけでなく結婚にもおよんでいることに驚きました。

今は、親が昔のように子どもに何故家を継がせないのか、それは苦勞させたくないからです。農業を営ん

できてあまりかせぎがよいとはいえないからです。しかし、親としては、長男に継がせたいという気持ちはなくもないと思います。

●専業農家は、農業にどんな生きがいを感じているか Fさん

現在は、農業を経営している人は年々減少しています。そんな中で、地域で農業を営み頑張っている人はどんなことを考え、どんな思いで農業と取り組んでいるのかに興味を持ち、調べることにしました。

これまで、先輩たちが調査した農家の方々の「農業に対する生きがいについて」まとめることにしました。その結果、いろいろな感想を大きくまとめると、次のように整理することが出来ました。

- ① 農業経営に対する将来の目標と実践をふまえた課題をきちんと持つていること。
- ② 経営主およびその生産物が地域や消費者に高く評価されていること。
- ③ 自然を相手にしていること、など。

私は、最初この研究に乗るじゃなかったけど、調査票からどんどん飛び出してくる生きがいについての感想がとてもおもしろくなってきました。農業を続けて

行くうえで、生きがいはとても大事であることが分かり、それを自分で見出すことはとても大変なことだと思えます。私のこれからの人生において、この研究に協力してくれた農家の皆さんのように生きがいを見いだし、生きたいと思えます。

△流通のしくみ▽

●中条市場における青果物の集荷と出荷について

H君

私は、中条市場を見学するまでは市場というのは野菜や果物の「セリ」を扱っているだけだと思っていました。実際はすごく複雑であることがわかりました。そこで、野菜などがどのように流れ、また消費者に届けられるのかを調べようと思いました。わかったことは、

①中条市場で取り扱っている青果物は野菜が60種類以上、果物が50種類以上あり、また、季節によって旬なものがあり、取扱量は日々変化していること。

②これらの青果物は地元のプロデューサーからの集荷が主で、全国各地―関東・北海道・九州など―から集荷されていること。

③生産者から直接集荷するより農協による集荷が決まっ

た数量を集められるので、市場において農協の役割が大きいこと。

④出荷の場合は、セリにかけられた青果物は5割を地元の卸業者・小売業者に、残りを全国各地に輸送される。

⑤市場の業者は、ただやみくもに青果物を集めているのではなく、消費者が何を求めているか、農協など供給する側がどんな青果物をどれだけ販売したいかなど、需要と供給の実情をよく把握して、利益がでるようにしていることがわかりました。

△村上の特産▽

●「村上の茶」―北限の茶処村上、今昔物語 Y君

村上には、「お茶」「イヨボヤ（鮭）」「木彫堆朱」そして最近話題の「村上牛」などがあげられる。これまでに、村上の郷土芸能、地場産業については調べ、まとめてきたが「お茶」には手をつけてこなかった。そこで、村上茶がどのように伝わり、今日まで栽培されてきたかを調べることにした。

村上城下に茶畑が広がったのは、江戸時代（1620年）に伊勢神宮に参詣した折、持ち帰った徳光屋「土田覚左衛門」によるものである。村上藩は、藩の

財源として茶業を庇護し、奨励した。販路は村上だけに止まらず、近県や青森、さらにはウラジオストクへも出荷し、明治には横浜に取扱所を設け、外国に輸出した。

昭和に入ると、「茶屋」の名が至る所に見られ、昔の町名に「茶の子町」の名も出てくる。そして、村上大祭の山車には「茶摘み娘」が登場する。

積雪の多いこの地帯では、「鳥の足」といい、5本の指を土に刺し、その穴に3〜5果の茶を植えることによって、互いに絡み合つて積雪に耐えるように工夫したり、茶樹の丈を低く抑えたりしている。茶は暖地産の照葉樹といわれるが、この地帯は、冬期間が長く、年間の日照時間が短いため、炭酸同化作用が穏やかで、タンニンの含有量が少なく、甘みが強く出るといふ。また、良質のお茶にするには、茶の樹齢が古い方が良いともいわれ、村上の茶の平均樹齢は150年以上あり、中には300年以上の茶樹もある。

いつも何気なく飲んでいる村上茶に、こんなにも歴史がまつており、茶を育ててきた先人の苦勞があつてこそと、誇りにも思えるようになった。とにかくこの調査をおこなつて良かった。

教員資格取得のために教育実習生として、来校した大学生がこれらのレポートを読んで、学生でもこんなレポートを書けないなどと、生徒たちを励ましてくれた。

4、地域での学びを教科「産業社会と人間」につなげる

以上のように、生徒たちが学校外に目を向け、地域のなかで学びとる学習効果は大きい。

当校は、01年度農業科・農業経済科・林業科・商業科・情報処理科の併設学科が、総合学科に改組された。総合学科のねらいを果たす上で、1年次に履修される「産業社会と人間」（原則履修科目）がその要といわれる。この科目の目的は「自己の個性や適正を見つめ、自己を生かす将来の職業選択を考えさせ、人間のあり方、生き方への探求に基づく自己プランをたてさせる」としている。

そこで、先の実践からこの教科内容に、生徒が地域に入り、地域で働く人たちから学ぶことの重要性を教訓に、地域の事業所や企業に生徒が出向く「職業人へのインタビュー」を取り入れ、実施することになった。

これは、地域の職業や産業についての理解を深め、将来の進路選択や自己の進路実現に必要な職業観・労働観を養うために、岩船地域の希望する企業・公官庁・団体など146社を訪ねた取り組みである。さらに、この取り組みを体験学習によってより深めるため、2年生の夏休み(3日間)を利用し、希望者による「インターシップ」を実施した。ファームステイ(野菜農家)に参加したある生徒は、「毎日暑い中、汗だくで働く姿を見て、やりがいのある仕事をするのはこんなにも人を生き生きと輝かせる。自分もやりたい仕事に就き、キラキラ輝きたい」と感想を述べ、働くことを通して、生きがいのある仕事に就くことの大切さを肌で感じ取ってきた。

5、まとめにかえて

地域に入つて現実の生産農家の話を聞きながら、ふつと疑問に思ったことをきっかけに、この疑問を解くべく自ら資料を集め、探究する学習は、知的関心と学習意欲を引き出す。地域と関わる教育実践は、学校の中だけでは得られない力を持っている。

また、自分たちの住む地域に入ることによって、地

域農業の持つ諸問題の認識を深め、視野を広げる学習は、何よりも自ら学ぼうとする姿勢や態度を培い、将来の学ぶ意欲にもつながる。

なお、「職業人インタビュー」を引き受けてくれた事業所にアンケートをお願いした(146社内70%の回答)。その中に「何事にも目的意識を持ち立ち向かう若者は、未来の希望につながる。このような生徒を育てるために、家庭・学校・地域社会が一体となつてやるべきだ」と提言された方がおり、地域で働く人たちとともに、学校教育をすすめていくことの大切さを改めて、教えてくれた。

(うちやま ゆうへい 所員)

